

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K02636

研究課題名(和文) 味覚語彙における普遍性と相対性に関する研究

研究課題名(英文) A Study of Universality and Relativity in Taste Vocabulary

研究代表者

武藤 彩加 (MUTO, AYAKA)

中部大学・人文学部・教授

研究者番号：00412809

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：言語により様々であるとされる味覚語彙について、味覚語彙は恣意的に分割されているのではなく複数の言語に共通した法則性があるという仮説を立て、検証した。その結果、以下の点が明らかになった。例えば中国語や韓国語、タイ語などアジアの言語においては、触覚の表現が多く使用されるなど似通った表現の分布がみられる。他方、スウェーデン語や英語は、より客観的な「一般評価」の表現が多く使用される等、アジアの諸言語とは異なる様態をみせる。またこれらの結果を受け、アジアと非アジアの中間に位置するトルコ語についても調査を行い検証した。以上本研究では、言語と非言語的な領域との関連性について考察し、その一端を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究では、味覚器官の機能の共通性に基づく言語普遍性の一端を明らかにした。具体的には6つの言語を対象とし、慣習化された表現の言語使用の状況をとらえた。この研究での成果は、各々の言語に入り込んだ物の見方を客観視できる資料となることから、語学教育の現場にも援用できる。なお日本語以外の言語についても味表現の全容を体系的に示した研究はなく、貴重な言語資料となる。普遍性に関する検証は、各言語の表面的な相違や様々な背景の違いの中にある、諸言語に共通した特性を追及するものであるが、この普遍性の理解は、脳の構造や働きに関する理解、ひいては人間の理解とも深く関わっていることから、認知科学の発展にも資する。

研究成果の概要(英文)：We conducted a survey of taste vocabulary, which is said to vary across languages, based on the hypothesis that taste vocabulary is not divided arbitrarily but has a common law among multiple languages. As a result, certain points became clear. In Asian languages, such as Chinese, Korean, and Thai, similar distributions of tactile expressions were found, whereas, Swedish, English, and Turkish showed a different distribution from Asian languages, for example, using more objective "general evaluation" expressions (e.g., "good taste"). In this study, we also examined the relationship between language and nonverbal domains (environmental, physiological, and cognitive motivations) and clarified certain aspects of this relationship.

研究分野：認知意味論

キーワード：普遍性 多様性 生理的動機づけ 環境的動機づけ 認知的動機づけ 味覚 触覚 共感覚的比喩

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

Berlin&Kay(1969)では、一見多種多彩な色彩語彙体系において 20 言語に共通した法則性がみられることを明らかにした。つまり色彩語彙はマンセル・システムと対応するプロトタイプ構造を持っており、生理学的メカニズムにより動機づけられるという。本研究では色彩語彙と同じく「味覚語彙には複数の言語に共通した法則性がある」という仮説を立て、複雑で恣意的とされる味覚語彙の(生理学的普遍に基づく)普遍性と(食文化の違いによる)多様性について検証した。

2. 研究の目的

アジアの言語(タイ語, 韓国語, 中国語)および非アジアの言語(スウェーデン語, 英語)を対象とし, 次の 2 点について検証した。

1. 普遍性について: 日本語の味ことば分類表によってその他の言語の味表現も分類できるのだろうか。
2. 多様性について: 5 つの言語, それぞれが有する特徴はどのようなものであるか, またアジアの言語と非アジアの言語とを比較した場合のそれぞれの特徴はどのようなものであるのか。本研究ではこれまで, タイ語, 韓国語, 中国語, スウェーデン語, 英語について, 言語ごとにその特徴などを検討してきた(武藤 2011 ほか)。本研究ではこれまでの調査の結果をふり返りつつ, さらにアジアと非アジアという観点から, 味覚語彙における規則性とその体系に関する検証, および味覚語彙の種類や使用回数などに関する検証をおこない, 複数の言語間に現れる共通性について改めて考察した。具体的には「味覚語彙は恣意的に分割されているのではなく 複数の言語に共通した法則性がある」という仮説を立てて検証し, 複雑で混沌としているとされる味覚語彙の(生理学的普遍に基づく)普遍性と(食文化の違いにより生じる)相対性を明確に示すことを目的とした。またこの結果をふまえ, アジアと非アジアの中間に位置するトルコ語についても調査を行った。

なお大橋(2010)などの先行研究においては, 味を狭い意味の味覚だけに限定せず, 触覚あるいは知識で味を捉えた表現をも味を表す表現に含めている。本研究においても味覚を広義に捉え「さまざまな感覚を複合したもの」(石毛 1983: 22)とする。すなわち, 食べるという行為に参加するすべての器官で受容される感覚や, 食そのものだけでなく食をとりまく環境を含むものすべてを考察の対象とした。

3. 研究の方法

各言語の母語話者に対する調査は以下の手順で行った。150 食品のリストの中の, 各食品について, その味を表現するのに当該言語ではどのような表現があり得るのかを自由に書くよう依頼した。なお, アンケートの説明から依頼, 収集まで筆者自身で現地にて行ない, あらかじめ大学および受け入れ教員とその所属先の長からの承認を得たうえで実施した。回答者の専攻や学年などについても調査紙に記入を求めた。なおアンケートの回答に要する時間制限は特に設けず, 各自の自由とした。このような手順で収集したデータを「味ことば分類表」(瀬戸 2003)をもとに作成した「味ことば分類表・改訂版」により分類した。この分類表は, 言語学的な観点から豊富な日本語の味表現を網羅して帰能的に分類されたものであるが, 食品科学的な観点からみても網羅的に味の表現を分類することが可能である。

4. 研究成果

1. 慣習化された味覚語彙の収集: アジアの言語(タイ語, 韓国語, 中国語)および非アジアの言語(スウェーデン語, 英語), およびトルコ語の母語話者に対する調査をもとに, 味に関する表現を網羅的に収集し電子化した。
2. 分類: で収集されたデータをもとに, 味ことば分類表を分析の枠組みとし, 各々の言語における味言葉の全容を体系的に示した。
3. 普遍性に関する分析: 6 つの言語に共通する普遍的要素(生理的動機づけ)を探った。また, 各々の言語の相対性(環境的動機づけ, 認知的動機づけ)についても明確に示した。
4. さらに, 共感覚的比喩の観点からも分析を行い, ここにも普遍性がみられるのか, という点についても検証し明らかにした。

上記について具体的なデータを以下に示す。まずアジアの 3 言語にみとめられた共通点を以下にまとめる。

1. カテゴリ別でみると, 3 言語とも硬軟表現がもっとも多く使用された。
2. ついで甘味が多く使用されたという点も 3 言語に共通して認められた。
3. 芳香と粘性も 3 言語とも多く使用された。
4. 表現別でみると, 使用された回数上位 10 表現において, 甘味や芳香の表現が 3 言語とも

多く使用された。

すなわち硬軟と甘味が突出して多く芳香と粘性の表現も多いという点が、共通してみとめられる特徴である、という可能性が今回の調査結果からは示唆された。

一方、非アジアの言語には、アジアの言語とは異なる共通点が認められた。すなわち、「一般評価」と「素材特性」が飛び抜けて多く使用されるという点である。一方で、アジアの言語で飛び抜けて多く使用された芳香と粘性の表現は、英語とスウェーデン語においてはあまり使用されず、硬軟については英語には一定数みられるものの、スウェーデン語においてはほとんど使用されなかった。次に、多く使用されたカテゴリと表現の種類が多かったカテゴリを以下にまとめる。

1. タイ語

- ・使用頻度：硬軟，甘味，芳香，粘性，素材特性
- ・表現の種類：硬軟，素材特性，色，粘性，一般評価

2. 韓国語

- ・使用頻度：硬軟，甘味，一般評価，芳香，粘性
- ・表現の種類：一般評価，硬軟，粘性，明暗，乾湿

3. 中国語

- ・使用頻度：硬軟，甘味，粘性，味覚評価，芳香
- ・表現の種類：硬軟，粘性，一般評価，甘味，味覚評価

4. スウェーデン語

- ・使用頻度：一般評価，素材特性，甘味，触性，結果
- ・表現の種類：一般評価，素材特性，素材，製造プロセス，場所

5. 英語

- ・使用頻度：一般評価，素材特性，硬軟，味覚評価，甘味
- ・表現の種類：一般評価，素材特性，素材，味覚評価，結果

これらをまとめると、5つの言語に共通点して多くみられたのは次の表現であった。

- ・「一般評価」表現：スウェーデン語，英語，韓国語，中国語，タイ語
- ・「甘味」表現：スウェーデン語，英語，韓国語，中国語，タイ語
- ・「硬軟」表現：英語，韓国語，中国語，タイ語
- ・「芳香」表現：韓国語，中国語，タイ語
- ・「粘性」表現：韓国語，中国語，タイ語

以上のように、一般評価と甘味の表現は、すべての言語において多く使用された。40種類の味表現の中でもとりわけ、この2種類の表現のみが5つの言語に共通して多くみられたという点は注目すべき結果である。一方、一般評価と素材特性が飛び抜けて多く使用され、また表現の種類の数も目立って多いというのは非アジアの言語(スウェーデン語と英語)に共通する特徴であった。他方、アジアの言語においては甘味と硬軟がそれにあたり、3言語で目立って多く使用された。またアジアの言語においては芳香や粘性も多く使用されたが、非アジアの言語ではあまり使用されなかった。

アジアと非アジアの中間に位置するトルコ語については次のような結果であった。まず普遍性について、2018年11月に行った調査においては、次の表現については全く使用がみられなかった。

・渋味，旨味，視覚の共感覚表現(形態を除く)，芳香，痛覚，冷覚，場所，食べ手，市場価値
すなわちトルコ語の結果は、これまで調査した言語とは異なり、表現の分布が偏っていた。これらの表現が本当にトルコ語では使用されないのかどうか、今後、年齢層を広げるなどしてさらに調査を続ける。

次に多様性について、今回の調査では121種類のトルコ語の味表現が回答され、トルコ語にも多数のおいしさとまずさを表す表現が存在することが示された。その中身をみてみると、延べ語数では硬軟と乾湿，触性が多く回答され、異なり語数でもやはり硬軟と、粘性，乾湿の表現が多く使用された。すなわち、トルコ語では「食感」に関わる表現が多用された。またこのうち「硬軟」の表現は、おいしさにもまずさにも多く使用された。さらに味ことば分類表のグループ別でみると、共感覚表現が最も多く回答された。ここでは仮説に沿わない例も一定数認められ、特に「嗅覚 味覚」表現で味を表すケースが複数認められたものの、一方向性仮説に沿う「触覚 味覚」表現がほとんどであるという結果であった。

以上、この研究では複数の言語を対象とし、味を表す表現のインターフェイス - 異なる言語間を結びつける共用部分 - について検証してきた。以上で述べた研究成果を以下にまとめて結論とする。まず普遍性については、5つの言語の母語話者による味を表す表現は、おおむね従来の先行研究で示されている「味ことば分類表」によって分類が可能である。従ってそこには5言語にある種の共通する規則性が認められる。さらに、アジア・非アジアという枠組み内において

も共通性がみとめられた。例えば、中国語と韓国語とタイ語といったアジアの言語においては、硬軟、甘味の表現が飛び抜けて多く使用されるなど似通った表現の分布がみられるが、その反面、スウェーデン語と英語といった非アジアの言語の表現の分布のさまは一般評価表現や素材特性といったより客観的な表現が目立って多く使用されるなど、先のアジアの諸言語とは異なる様態をみせる。その一方で、表現の分布と広がりには言語ごとに異なる多様性も同時に認められる。以上から、味を表す表現には人間の生理学的普遍に基づく共通性が存在する可能性があるのと同時に、表現の分布と偏りには環境などの要素や食生活、文化的背景等の差異が直接的に反映される可能性も示唆される。ただし本調査は被験者の数、年齢層とも非常に限定されたものであるため、被験者を増やし年齢層を広げるなどして引き続き調査が必要である。

【引用文献】

- ・ 石毛直道(1983)「味覚表現語の分析」『言語生活』382, 筑摩書房, 14-24.
- ・ 石間紀男(1995)「食品に対する評価の基礎要因」『食の文化フォーラム 食のことば』ドメス出版, 113-128.
- ・ 大橋正房他編著(2010)『「おいしい」感覚と言葉』食感の世代』B・M・FT 出版部.
- ・ 大橋正房(2015)『シズルワードの現在「おいしいを感じる言葉」調査報告』B・M・FT 出版部.
- ・ 瀬戸賢一(2003)『ことばは味を超える 美味しい表現の探求』海鳴社.
- ・ 武藤彩加(2011)「スウェーデン語における味を表す表現の収集と分類」『日本認知言語学会論文集』11, 日本認知言語学会, 234-244.
- ・ 武藤彩加(2013)「韓国語における味を表す表現の類型化 - 日本語と韓国語の比較を通して」『韓国日本語学会論文集』37, 韓国日本語学会, 17-35.
- ・ 武藤彩加(2015)『日本語の共感覚的比喩』ひつじ書房.
- ・ 武藤彩加(2016a)「中国語母語話者による味を表す表現-日本語との比較から」『日本語教育学会研究集会第2回中部地区予稿集』日本語教育学会, 21-24.
- ・ 武藤彩加(2016b)「英語母語話者によるおいしさの表現 - 日本語との比較を通して」『広島国際研究』22, 広島市立大学国際学部, 105-115.
- ・ 武藤彩加(2018)「タイ語母語話者による味を表す表現」*CAJLE2018 Proceeding*, Canadian Association.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 武藤彩加	4. 巻 1
2. 論文標題 「おいしさのカタカナ語の類義分析 - 「スイートな」「ヘルシーな」「フレッシュな」が表す意味」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『五感で楽しむ食の日本語』	6. 最初と最後の頁 163-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武藤彩加	4. 巻 43
2. 論文標題 トルコ語母語話者による「味を表す表現」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文学部研究論集	6. 最初と最後の頁 55 - 69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武藤彩加	4. 巻 9
2. 論文標題 味を表す表現の使用に関する一考察 - 対象言語学的観点から -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 広島市立大学国際学部叢書	6. 最初と最後の頁 79 - 96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武藤彩加	4. 巻 6
2. 論文標題 タイ語母語話者による「味を表す表現」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 CAJLE2018 Proceedings	6. 最初と最後の頁 181-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武藤彩加	4. 巻 53
2. 論文標題 味を表す場面における「事態把握」に関する一考察 複数の言語との比較から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 比較文化研究	6. 最初と最後の頁 20-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武藤彩加	4. 巻 23
2. 論文標題 中国語の味を表す場面における「話者に意識されない男女差」 母語話者を対象としたアンケートに基づく事前調査	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『広島国際研究』, 広島市立大学国際学部	6. 最初と最後の頁 93 - 105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 武藤彩加	4. 巻 18
2. 論文標題 味を表す表現における動機づけに関する一考察 - 生理的動機づけ, 認知的動機づけ, および環境的動機づけ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『日本認知言語学会論文集』, 日本認知言語学会.	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武藤彩加	4. 巻 17
2. 論文標題 日本語におけるテクスチャーを表すオノマトペ - スウェーデン語と英語, および韓国語と比較して	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Journal CAJLE (Canadian Association for Japanese Language Education)	6. 最初と最後の頁 64-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 武藤彩加	4. 巻 22
2. 論文標題 英語母語話者によるおいしさの表現 - 日本語との比較を通して	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『広島国際研究』	6. 最初と最後の頁 105-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 武藤彩加	4. 巻 -
2. 論文標題 中国語母語話者による味を表す表現 - 日本語との比較から	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『日本語教育学会研究集会第 2 回中部地区予稿集』	6. 最初と最後の頁 21-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 武藤彩加
2. 発表標題 おいしさを表す五感の表現とその動機づけ
3. 学会等名 東アジア国際言語学会第 8回大会 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 武藤彩加
2. 発表標題 日本語のおいしさ表現と共感覚
3. 学会等名 中部大学教員研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武藤彩加
2. 発表標題 おいしさのカタカナ語の類義分析 - 「スイートな」「ヘルシーな」「フレッシュな」が表す意味
3. 学会等名 第181回現代日本語学研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武藤彩加
2. 発表標題 タイ語母語話者による「味を表す表現」
3. 学会等名 Canadian Association for Japanese Language Education 2017 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武藤彩加
2. 発表標題 日本語の事態把握に関する一考察 複数の言語における味を表す場面との比較から
3. 学会等名 カイロ大学『日本学研究所』創設記念シンポジウム(非西欧社会の近代化再考:日本とアラブ(エジプト)の場合),於エジプト,カイロ大学文学部,2017年7月15日.(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 武藤彩加
2. 発表標題 「味覚の共感覚表現」の動機づけに関する一考察—シンポジウム:「オノマトペ、共感覚とメタファー:3つの認知的現象をめぐって」
3. 学会等名 日本語用論学会メタファー研究会,於広島国際大学,2017年12月9日.(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 武藤彩加
2. 発表標題 「味を表す表現」使用にみられる男女差 - 中国語母語話者を対象とした調査から
3. 学会等名 日本語教育国際大会 Bali ICJLE2016 (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 武藤彩加
2. 発表標題 中国語母語話者による味を表す表現 - 日本語との比較から
3. 学会等名 日本語教育学会研究集会第2枚中部地区
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 広島市立大学国際学部編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 215
3. 書名 複数の「感覚・言語・文化」のインターフェイス 境界面での変化と創造に関する新しい見方	

1. 著者名 北村紗衣編	4. 発行年 2016年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 414
3. 書名 『共感覚から見えるもの - アートと科学を彩る五感の世界』	

1. 著者名 大橋正房他	4. 発行年 2016年
2. 出版社 BMFT出版部	5. 総ページ数 221
3. 書名 , 『ふわとろ SIZZLE WORD 「おいしい」言葉の使い方』	

1. 著者名 広島市立大学国際学部<際>研究フォーラム編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 文真堂	5. 総ページ数 387
3. 書名 『<際>からの探求：つながりへの途』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------